ニッポン臨終図巻

ドクター和の

㊾ 脳外科医　福島孝徳

患者のために生きたヒーロー

若い頃、嫉妬は女性の専売特許だと思っていました。しかし年を重ねるごとに、そうではないと知りました。女性の嫉妬の多くは恋愛感情から生まれるものかもしれませんが、男性の嫉妬はもっとややこしい。山崎豊子の『白い巨塔』にあるように医者の世界は特にそう。あの小説は医者の出世欲を巡る壮大な嫉妬物語とも読めます。

この人も、ある時期から医者のあいだでは羨望の、否、嫉妬の的でした。「何が神の手や！　ふざけるな！」と嫉妬を肴（さかな）に杯を重ねる大学病院の外科医たちを夜の酒場で何度も見かけました。医者専用の匿名掲示板での書き込みもありました。成功者の一つの失敗を取り上げて嘲笑う医者たちがいます。「神の手とかいって調子に乗っているからだ」と。だけどまさか、自分から「神の手」なんて言うわけないやんか…。出世欲や名声欲に駆られている限り、絶対にその人はヒーローにはなれない。自分のことは構わず他者のために生きられる人こそが真のヒーローになれる。この人は外科医療のヒーローだったと僕は思っています。

天才脳外科医と呼ばれた福島孝徳氏が3月19日に米国で死去したと、名誉客員教授として所属していたデューク大学が発表しました。享年81。死因は明らかにされていません。

福島医師は、1980年に三井記念病院脳神経外科部長に就任。頭部を大きく開くことなく、数センチの穴で行う鍵穴手術（キーホールオペレーション）を確立。この方法で多くの患者を助け、一躍有名になります。しかしその後、論文と人脈だけを重視する日本の医学会に見切りをつけ、40代後半からは日本より臨床実績が評価される米国でさらに腕を磨きました。普通ならば外科医としては限界の60代を過ぎても世界中を飛び回り、治療の困難な患者さんに会い続け後輩の育成にも尽力されました。生涯手術数はなんと2万4000例。座右の銘は「すべては患者さんのために」でした。

彼の三井記念病院時代の一番弟子である平川亘医師（認知症の名医です）から、僕はこんな話を直接聞いたことがあります。

「福島先生は365日、1日も休まない。休まず仕事をするのが人生で一番大切なことだと仰る。現代ならコンプライアンス的にNGですが〈お前は死んでもいいから患者さんを助けろ〉と言われて鍛えられました。自分のことはそっちのけで手術をして、それでも助けられなかったときは、手術室の隅っこで神様に祈っていた」

神の手と呼ばれた医者が、患者のために神様に祈っていた…だけど彼のような人間を日本の医療界は嫉妬から潰しにかかるのです。最後にもう一度、書きましょう。「すべては患者さんのために」

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウイルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。